

415) 彼女を見送った日

去年の今ごろぼくたちふたり 全然知らない仲だったのに
今はこうして指をからませ よくありがちな恋人同士
ビルの向こうに赤い夕陽が 沈んでゆくのを黙って見てる
この光にはもう二度と 逢えないんだと思いつつ

彼女に逢ってぼくの心は 前にもましてメランコリーだ
一緒の時間はいいのだけれど 別れたあとがとってもつらい
特に今日から海外へ行く 彼女を送る もう死にそうだ
今日がすぎればこの次は いつ逢えるかもわからない

彼女を乗せたバスが出て行く 咳きこむように煙をはいて
別れぎには指切りをして 「元気でねっ!」て笑って見たけど
あと一年は彼女に会えぬ 寂しい日々が待ち受けている
テールランプが闇の中 溶けて行くまで手をふった

日めくり式のカレンダーには 何の予定も入っていない
彼女のいない暗黒の日を たったひとりで何をしようか
まるで宇宙の迷子みたいに ぼくの心は浮遊^{ふゆう}状態
無事に着いたと彼女から 言ってくるまでまだ遠い

→